

私立小学校卒業生の進路選択

著者	田中 節雄
雑誌名	椋山女学園大学研究論集 第1部
号	24
ページ	333-345
発行年	1993
URL	http://id.nii.ac.jp/1454/00001571/

私立小学校卒業生の進路選択

田 中 節 雄

The Career Selection of the Graduates from A Private Primary School

Setsuo TANAKA

1. 課 題

(1)課 題

一つの同じ小学校に在籍している子どもたちは、なぜその学校に入学することになったのだろうか。どのような要因がそこには介在しているのだろうか。親の教育観。地域の事情。本人の考え方。などなど。そしてその同じ小学校を卒業した子どもたちが中学へ進学し高校へ進学していくにつれて、当然のことながらさまざまにその進路が分化していく。あるいは逆に似たような進路を選択するかもしれない。

小学校、中学、高校、さらには大学・就職と人々は外的なあるいは内的なさまざまな要因によってその進路を多様に分化させていく。その分化（あるいは類似化）がどのようなメカニズムによって生み出されていくのか、そこに介在する外的・内的な諸要因は何か。それを明かにすることが本論文の課題である。

このような課題を追究する方法には大量のサンプルの数量的なデータに基づいた統計学的分析というものがあるが、ここでは少数のサンプルへの聞き取り調査の結果のインテンシブな分析という方法をとることにする。

(2)調査の概要

中京地区にあるS私立大学の附属小学校（以後S小学校と呼ぶ）卒業生を対象に聞き取り調査を行った。その概要は以下の通りである。

調査対象：「S小学校卒業者の生活意識調査」¹⁾に回答してきた卒業生のうち連絡がとれて聞き取り調査の依頼に応じてくれた人。²⁾³⁾

対象者数：18名

調査方法：2時間程度の聞き取り調査。聞き取り調査対象者の指定にしたがって自宅あるいは喫茶店で行われた。

調査時期：1991年2月～3月

調査対象の属性からわかるように、本論文での議論はいわゆる「一貫性教育」を謳っている学校に在籍している子どもたちに関するものである。したがって、そこで抽出された要因群は一般の公立小学校在籍の子どもたちの進路分化に関してそのままあてはまるものではない。

2. 分析方法

一人の人間のある行動についてその行動を発生せしめた要因を挙げようとするといくらでも挙げられるだろう。そこで一般に質問紙調査をもとにした数量的分析の場合には、それらの要因のうちのいくつかをあらかじめ研究者の側が想定してそれらの諸要因の間の統計学的関係を解明していくわけである。そうすることによってその行動とあらかじめ想定された諸要因との間の、あるいはそれら諸要因間の比較的単純な関係が明らかになる。しかもその関係は特定の個人に固有なものとしてあてはまるというものではなく、多くの人々の一般的な傾向として認められるものである。したがってそこで発見された法則は一般性を持ってはいる。すなわち、どの特定の個人にも何がしかの程度にはあてはまっている。しかし逆にそこで示されている要因以外のものがあつたとしてもそれはけっして発見されることはないし、また要因間の関係にしても想定された単純な関係以外には抽出することはできない。

ここで行おうとしているのはある意味ではその逆の方法である。あらかじめ要因を特定のものとして想定することはしない。むしろどのような要因が作用しているのかを〈発見〉することを目的としている。聞き取り調査の性格上、話手の意識に上った事柄だけがこちらから〈要因〉として分析され、その結果、重要な要因が話のなかに登場していないということはありうる。その難点は留意しておかなければならない。

そのようにして発見された諸要因がどのように関係しあい規定しあつて最終的に当該の行為を出現させたかを説明するのが次の段階である。ここで解明される〈関係〉〈規定〉は必ずしも統計学的に表現されるような単純なものばかりではないであろう。その際当然「解釈の妥当性」という質的調査につきものの問題が生じるが、ここでは常識的な推論を行うことでその問題はクリアーできると考える。命題の最終的な証明ではなく、いわばその仮説的な提示を目指すここでの課題にとってはそれで十分であるはずだ。

以上が分析にあたっての基本的な姿勢であるが、だからといって全く何の枠組みもなく分析を行おうとするのではない。個々の要因としてどのようなものがあるのか、それについてはあらかじめ限定するようなことはしないが、それらの諸要因がどのような関係にあるのかそれを整理するための枠組みは用意している。諸要因を抽出し、関係を明かにするための視点といってもよいだろう。それは次のようなものだ。

①本人自身に直接関わる要因と本人に直接関わらない外部的な要因とがある。前者に含まれるものは、本人の〈夢〉〈希望〉〈価値観〉〈意欲〉〈学力〉〈体力〉〈性格〉など。後者としては主として両親の〈意識〉や〈経済的状況〉あるいは学校の〈所在地〉などがある。他にも学校の教師に関わるものなどがある。

②主観的要因と客観的要因がある。主観的要因とは、本人に関することといえば〈夢〉〈希望〉〈価値観〉など、広い意味での本人の〈意識〉といえるものあるいは〈意識〉によって本人が自由に決定することのできるものである。客観的要因とはたとえば本人に関することといえば、〈学力〉〈体力〉〈才能〉など、本人が自由に決定することのできないものである。また、たとえば両親に関していえば、あらゆることが本人から見れば客観的要因ともいえるが、ここではそう考えずに、両親の〈夢〉は主観的要因とし、その〈経済的状況〉は客観的要因とする。以上の二つの枠組みは行為の主体にとってその行為がどれほど

自らの主体的な意思決定によってなされうるのかを明かにするために設定されたものである。

③プッシュ要因とプル要因がある。ここでさしあたり問題になっているのはS学園に在籍する小学生・中学生・高校生・大学生である。彼女らの進学行動＝進路選択がどのようなものであるのかを分析することを課題としているのであるが、それは一面から言えばS学園から外へ出るのか出ないのか、そしてそれはなぜかという問題でもある。S学園から外へ出る場合、S学園に在籍していることが何等かの意味で嫌になったから出るということがあるだろう。その場合、嫌になった気持ちあるいはそれを引き起こした原因をプッシュ要因と呼ぶ。それに対してS学園以外の場に何等かの魅力があるから出るということもある。その場合、それらの場が持っている魅力をプル要因と呼ぼう。

もちろん二つの要因のいずれか一方のみが作用しているとは限らない。両者がともに作用することによってS学園から出るという事態が生じることもある。

④主要な要因と補助的な要因がある。たとえば、S高校のある生徒がS大学へ進学したとして、その要因として〈家庭の経済状況が本人の大学進学を許した〉〈母親が好きなようにしなさいと言った〉〈大学への進学になんの迷いもなく当然のことと思えた〉〈大学が近所にあった〉などの事柄や意識が語られたとする。これらはいずれもその生徒の大学進学という事態を成立させた要因であることは確かであろう。しかし、全ての要因が同等な重さを持った要因であると考えすることはできない。「大学進学」という事態は、〈大学への進学になんの迷いもなく当然のことと思えた〉という本人の主観的要因がなければ決して出現しなかったであろうが、〈大学が近所にあった〉という要因がなかったとしても出現したであろう。その意味で前者は主要な要因であり、後者は補助的な要因とすることができる。もちろん主要な要因がたった一つとは限らず複数あることもあるだろう。

本論文では18の事例について以上のような観点から分析を加えたが、紙数の都合上各学校段階について2例づつのみ分析の過程を詳細に記述してある。他の16例の分析結果については一覧表のかたちで提示する。ちなみにこの一覧表は分析の結果「主要な要因」として抽出されたものだけを整理したものである。「主要な要因」を抽出することだけが本研究の課題ではないことは上述の点からも言えようが、「主要な要因」を18事例について整理することによって「少数事例がはたして母集団の特性を代表しているか」といういわゆる事例研究の〈代表性の問題〉をいくらかでもクリアーすることを目指した。

3. 分 析

I 小学校入学

事例A

〈S小学校入学〉うちはとにかくね、一貫教育っていうのかしら、そういうのをさせたかったみたいで。何とか何か身につけさせよう、受験もないしそのあいだに何か身につくものがあればそれでいいんじゃないかって。好きなことやれるように自由なところへ入れようと。それがN市で小学校からあるのってS学園ぐらいですよ。私は長女で、下の弟、妹は普通に公立へ行きましたからね。私は下と少し年が離れていたもんですからまだ余裕が

あったんじゃないかなその頃は。Sっていうと公立より聞こえがいいっていうものもあるし、それに古いでしょあそこは。伝統あるっていうか。うちは両親ともここら辺の地元のひとなんで昔から知ってたっていうのもあったかもしれない。

〈分析〉AさんがS小学校へ入学したのは両親が彼女に「一貫教育」を受けさせたかったからだ。すなわち、たまたま近所にS小学校があったからというような偶然的な理由などによるのではない。Aさんの両親は自分の娘には一貫教育が望ましいという自分達の独自の教育観を持っていて、その教育観によって彼女をS小学校へ入れたのだ。一貫教育がのぞましい理由はAさんによればこうだ。「受験もないし、その間になにか身につくものがあればそれでいいんじゃないか。好きなことやれるように自由なところへ入れよう。」この言葉を踏み込んで解釈すれば次のようになるだろう。女の子は男の子とちがって少しでも威信の高い大学への入学を目指してしのぎをけずって勉強する必要はない。学校生活のなかで将来役に立つような何か、自分の独自な個性となるような何かを身につけてくれればそれでいい。とするならば受験受験で学校生活が制約される公立よりも、高校、さらには大学までの進学を保証されていて受験のことを心配する必要がなく、従ってそのゆったりとした学校生活のなかで好きなことを自由にやれる私学（の一貫教育）の方がいい。このようなAさんの両親の意向＝教育観がAさんがS小学校へ入ることになった主要因だったと言えるだろう。

そのうえに、「小学校からある私学はN市にはS学園しかなかった」こと、そのうえSは伝統もあって公立よりは聞こえがいいこと、両親は地元の人なので昔から知っていて馴染みがあったこと、などの要因が補助的な要因となってAさんのS小学校入学に促進的に作用した。そして最後に、Aさんが長女で弟や妹と年が離れていたので家庭に経済的余裕がまだあったという事情がAさんの入学を保証した。

〈まとめ〉

- A 本人外の要因：〈主観的要因〉一貫教育を評価する親の教育観；〈客観的要因〉S学園が近くにあったこと、S学園の世間的評価の高さ、家庭の経済的余裕、親が地元の人間なのでS学園を昔から知っていたこと
- B 主要な要因：一貫教育を評価する親の教育観

事例B

〈S小学校入学〉私の意思は全然ないんですがね。母が親戚同様にしている人がS小学校のすぐ側に住んでみえたんです。それで、いいよということで、じゃあそうしようかなということと、やっぱり上までありましたから、女の子だから生存競争に打ち勝たなくてもまあ適当にいけばいいだろうという思いがちょっとあったのでしょうね。よっぽどひどくなければあの中であんばって行けば上までいけるからという思いがあったんじゃないでしょうかね。母が言うには、地元の小学校でもいいんですけど、女の子は服装がうるさいということもすごく聞いていたらしいんですね。でもS小学校だと制服です。あの子と一緒だから嫌だとかそういうのが全然ないからいい、というのもあったらしいです。でも父とかおばあちゃん達はある程度反対したみたい。やっぱり近所の学校でいいんじゃないかって。お友達もいるから。

〈分析〉BさんがS小学校へ入る直接的なきっかけはBさんの母親が親しくしている人が

勧めたことである。その人が何等かの基準によってS小学校の教育を好意的に評価していたのでBさんの母親にS小学校を勧めた。それでBさんの母親はBさんをSへいれようかと思うわけだが、彼女は決して親しいひとに勧められたからという理由だけでそう思ったのではない。Bさんの母親には自分なりの教育的判断があった。「女の子だから生存競争に打ち勝たなくてもいいだろう」という男の子に対するのとは違った教育的な期待。「よっぽどひどくなければあの中で頑張っていけばうままで行けるだろう」という予測。前者の期待がBさんをS小学校へ入れる主要な要因だったと考えられる。その要因を補助的に強化したのが後者の予測とさらに「S小学校は制服だから服装のことで心配しなくてもいい」という判断とであった。他の家族（父親や祖母）は母親の意向に反対で、友達もいるので近所の公立小学校の方がいいと考えていたのだが、結局母親の意向が通った。なぜ母親の意向が最終的に優先されることとなったのかは不明である。いずれにせよ「近所であること」「友達がいること」という公立小学校の持つメリット以上のメリットをS小学校の教育は持っているとしてBさんの母親は（そして結局は家族全体も）判断したわけである。

〈まとめ〉

A 本人の要因：〈主観的要因〉親の指示の受容

B 本人外の要因：〈主観的要因〉母の知人の勧め、母親の教育観「女の子は生存競争に打ち勝たなくてもいい」「S小学校は制服だから良い」と予測「うままで行けるだろう」

C 主要な要因：母の知人の勧め

〈18事例のまとめ〉

18事例のS小学校についての主要な要因をまとめたものが表1である。

表1 S小学校入学の主要な要因（数字は事例数）

	本人の要因	本人外の要因
主観的要因	雰囲気への憧れ	親の意向「女子は一貫教育」 5
		親の意向「自由がいい」 2
		親の意向「少人数がいい」 /
		叔母の勧め 2
		親の知人の勧め 小学校の教師の勧め
要客観的 要因	公立小学校への不適応	家が近いこと 2 叔母がS小の教師 親戚がS小の関係者

S小学校への入学については親および周辺の人々（叔母、知人）の意向というものが最も大きな要因となっている。一般的に、公立の小学校の場合であれば「学校が家に近い」ことが入学の主要な要因になると考えられる。S小学校の場合はそのような（本人および家族にとっては）偶然的な要因で入学が選択されることは非常にすくないことがわかる。現在でもその傾向は変わらない。⁴⁾

Ⅱ 中学進学

事例C

〈S中学進学〉6年生は20数名しかいなかったんですね。で、そのうちの半分はよその私学、たとえばKへ行ったりNを受けた子もいたし、N大附属へ行った子もいたし、いろいろあるんですよ。あと残りの半分がそのまま上へ、というふうで、私はその半分だったんですけど。だから、お友達といっしょがいいなって。ただそれだけの理由ですね。よその私学を受ける気もなかったし、親は別に、何も考えてなかったのかなあ。あ、でも親は公立に行きなさいって言った時もあったけど。父親はそのまま上へやるつもりでいたんですけど、やっぱり母親が経済的なことを考えていたみたい。

自分では何にも考えていないんですよ。中学はすぐ側にあって、プールとかは私たちのところは校舎のなかになかったから、中・高のプールを借りていたし、だから「外」っていう感じはしなかったですね。卒業したら上へいくという以外には何も考えていなかったですね。ぼーっとしてたんじゃないかな、ほんとに。

〈分析〉Cさんは小学校卒業後そのままS中学校へ進学した。その事態を生じさせた要因としては、Cさんの主観的要因に関しては「お友達と一緒にいいな」というCさん自身の意向がある。しかしこの意向はCさんの選択にとってそれほど強い要因として働いたとは思えない。すなわち、友達と一緒にS中学へ上がって行く道と公立の中学や他の私立中学へ出て行く道という二つの選択肢を目の前に置き、両者を十分に比較考察したうえで「やっぱり友達と一緒にの方がいい」との結論を出したというものではない。むしろ「卒業したら上へ行くという以外には何も考えていなかったですね。ぼーっとしてたんじゃないかな、ほんとに。」という発言から伺えるように、中・高に対して「外」という感じを持っていなかったことが一因となって小学校を卒業したらそのまま上へいくんだという心理的状況が作られたことの方がCさんの主観的要因としては中心的なものだろう。そこには当然中・高のプールを借りたりしたことなどの客観的な事態が補助的要因として作用していたずだ。

両親に関しては、母親は経済的な理由でCさんに公立を勧めたこともあったが、父親はそのまま上へやるつもりでいた。そして結局父親の意向が通ったというわけである。父親の意向が最終的に通った原因が、それだけ父親の意向が強かったからなのか。あるいは単に父親の発言権の大きな家庭だったからなのか、それはわからない。いずれにせよ、経済的な状況はCさんのS中学進学に対して抑制的な効果をもっていたにもかかわらず、それを克服するだけの両親の意向の強さがあり、それが補助的な要因として作用したのである。

〈まとめ〉

- A 本人の要因：〈主観的要因〉本人の意向「友達と一緒にいい」、S中学進学の当然視
- B 本人外の要因：〈主観的要因〉父親の意向；〈客観的要因〉施設の共用
- C 主要な要因：本人のS中学進学の当然視

事例D

〈S中学進学〉中学へ進む時点で外の学校へ行く子はほとんどいなかったですよ。お医者さんの娘さんなんかは将来自分も医者って思ってみえたもんでそちらのほうへ行くため受験された方はいましたけど。このままS中学へ行くのがあたりまえという感じでした。お

友達全部一緒だったし。

〈分析〉Dさんは「このまま行くのがあたりまえという感じ」でS中学へ進学した。医者
の娘の子が将来自分も医者になるために他の中学を受験するという例はあっても、それ
によってDさんの〈S中学進学の当然視〉にはなんの疑義も生じていない。「お友達は全部
一緒だった」という事実はDさんのそのような意識を強化しただろう。

〈まとめ〉

A 本人の要因：〈主観的要因〉S中学進学の当然視

B 本人外の要因：〈客観的要因〉友達が全員同じようにS中学へ進学した

C 主要な要因：S中学進学の当然視

〈18事例のまとめ〉18事例について中学進学的主要な要因をまとめてみると次のようにな
る。

表2 中学進学的主要な要因

	本人の要因	本人外の要因
主観的要因	「当然」の意識でS中へ 友人と別れたくなくS中 成績が良く希望して公立へ 教師志望で他の私立へ	両親の勧めでS中へ
要客観的	志望校不合格で他の私立へ	近かったので公立へ

いくつかの点を指摘しておこう。

①中学への進学に関しては、小学校入学の場合と比較して本人の意向・希望が主要な要因
となっている場合が多い。もちろん中学生の段階では親の意思に逆らってまで子どもの意
向や希望が通ることは考えられないが、この場合も「親が同意している」という事態が中
学進学の大きな要因となっていることは当然である。だからここで押えておくべきことは、
中学進学にあたっては子どもたちは単に親の言うがままになっているのではなく、それな
りに自分の判断を下しているということである。それが次に述べるように「主体性」とは
かなりかけ離れたものであるとはいえ。

②S中学への内部進学者があげる理由で最も多いのは「当然そのまま上へあがるものだと思
った」というものである。すなわちS小学校卒業生にとってS中学への内部進学は「進
路選択」といえるほどの主体的・意識的な行動ではない。その点では公立小学校卒業生が
自宅近所の公立中学へ進学する場合とほとんど同様だと思われる。S学園の魅力がS小
学校卒業生を内部に引き留めるプル要因として作用している場合もあるがそれはやはり補
助的なものでしかない。ただ子どもの意識は似たようなものでも親の意識はかなり違っ
ているはずだ。親がS中学進学を当然視するのはそもそもS学園の教育に何等かの価値を見
だしたからである。したがって小学校を卒業したら次にはそのままS中学へ進学するのは
一貫した態度ということになる。

③それに対して公立中学など外部へ出て行く卒業生はそれなりの理由を持っている場合が

多い。その理由の最たるものは「S学園よりいわゆるレベルの高い高校・大学へ進学するためには中学から外へ出たほうがいい」というものだろう。

Ⅲ 高校進学

事例 E

〈S高校進学〉まわりはほとんどあたりまえのように上へ行くからね。でも公立の中学の友達に「受験だー」って言ってましたからねえ。そうすると、「あ、やっぱり大変なんだな、受験って何だろうね」なんて考えて。よその学校のことが分かるようになったのってほんとに大人になってからっていうか、だから、どういう公立の学校があるとかって全然知らなくて来ちゃったっていうか。

私は受験しますなんて考えないのが普通だったから考えられないというか。

部活で、中学のころから高校の先輩を見てましたから、素敵な先輩がやっぱりいたんですよね。楽器もうまくて統率力もあって、だから、自分もS高でああいうふうになればいいなあという感じでしたね。

両親も何ももう考えていなかったみたい。私にはお金がかかるってあきらめていたんじゃないかな。父親はやらせたかったみたいで別に何も言わなかったけど、母親はときどきぶちぶち言ってましたね。

〈分析〉Eさんにとって受験してS以外の高校へ進学することは考えられないことだった。EさんのS高校進学の主要な要因はそのような当然視にある。この点は他の生徒の場合と全く同様である。ただEさんの場合は公立中学に友達がいて彼らから公立中学の状況について聞いてはいた。

「あ、やっぱり大変なんだな、受験って何なんだろうね」などと思ったりもしているのである。しかしそのようなS学園以外の世界の情報を見聞きしたからといってそのような世界へ自分が出て行くことなどはEさんにとって想像できないことだったのだろう。そのようなS高校進学の当然視を生み出したのは「私は受験しますなんて考えないのが普通だった」生徒達の一般の傾向であるが、さらに部活動で魅力的な高校の先輩を見て自分もあなりたいと憧れたこともその当然視を補強することになったにちがいない。

〈まとめ〉

- A 本人の要因：〈主観的要因〉S高校進学の当然視；〈客観的要因〉公立の中学・高校に関する無知
- B 本人外の要因：〈主観的要因〉本人の意向に対する親の支持；〈客観的要因〉生徒たちの一般的な「内部進学」傾向、素敵な先輩の存在
- C 主要な要因：S高校進学の当然視

事例 F

〈S高校進学〉中学と高校は一緒ですよ。同じ敷地内で。だから全然違和感がないんです。中学校に行った子は全員高校に行っていますよ。受験した子っていうのは聞いたことないです。高校までは小学校の流れでずっと。

〈分析〉Fさんは小学校から中学校へ進学する時と全く同様の感覚で中学校から高校へも進学した。つまりFさんは主観的には全く選択すべき事柄としてではなくS高校への進

私立小学校卒業生の進路選択

学を選択した。S 高校への進学を当然視する意識は家庭生活・学校生活のなかの様々な要因によって徐々に形成されていったものだろう。インタビューで触れられていることでは、**「同じ敷地内」**という客観的な状況が**「違和感がない」**という主観的な状況を生み、**「中学校に行った子は全員高校に行っている」**という客観的な状況が**〈みんなと同じでいたい〉**という欲求を刺激して**〈S 高校へ行きたい〉**という欲求を生み出した。

ブル要因とプッシュ要因という概念をつかえば、F さんが高校へ進学するにあたって、S 学園にはそこから出て行きたくなるようなプッシュ要因がなかったし、また、S 高校以外の高校が F さんを引き付けるというようなブル要因もなかったということである。

〈まとめ〉

- A 本人の要因：〈主観的要因〉 S 高校進学を当然視、S 高校に対して違和感がない
- B 本人外の要因：〈客観的要因〉 中学と高校の敷地が同じ。友達がみんな S 高校へ進学している。

C 主要な要因：S 高校進学を当然視

〈18例のまとめ〉

18事例について高校進学を主要な要因をまとめてみると次のようになる。

表 3 高校進学を主要な要因

	本人の要因	本人外の要因
要主観 因的	「当然」の意識で S 高へ (私) なんとなく上へ 13	教師の忠告で S 高へ
要客観 因的	公立希望したが学力不足で S 高 (公) 公立不合格で他の私立 (公) 自分の力に合う公立	

①高校進学においても中学進学の場合と全く同様に、S 学園内部進学者の進路選択は「当然」という意識が最大の要因となっている。公立中学の生徒であれば、多かれ少なかれ、この時期に自らの意志による人生の進路に関する主体的な選択をせまられる。ところが S 中学の生徒はそのような選択をせまられることもなく、その意味では人生に対する自覚的な関わりをほとんどしないままでこの時点を通るわけである。

②公立中学の中学生の誰もが経験する進路選択における迷い・悩み・喜び・苦痛・挫折を S 中学の生徒のほとんどは経験しない。

③ S 高校への進学という現実の事態が生じるためにはたとえば「学力」という本人の客観的要因、「親の同意」や「家庭の経済的余裕」といった本人外の主観的・客観的な要因群が介在しているわけであるが、それらはすべて「補助的な要因」でしかない。本人にとっては「S 高校への進学は当然だ」と考えればそれは実現する。それほどまでに周囲の条件は本人にとって整備されているということである。

Ⅳ 高校卒業後の進路

事例G

〈私立音楽大学進学〉大学は音楽関係に行きたくてね。でももう一つね、英語もやりたかったんですよね。まあ得意な分野で考えますよね、将来どうしようとかは。だから得意なのが音楽と英語であとはたいしたことなかった。だからね、どうしようかなっておもってたんだけど。高校になってからは反抗期っていうのもあるのかな、あんまり担任の先生が好きになれなくてね。それで2年のとき、そろそろ進路をきめるっていうのあるじゃないですか。で、その時にね、担任の先生がね、「音楽ってすごく大変だから英語の方に行った方がいいわよ」って言ったんですよ。で、私そういうのってすごく反抗的だから、だったら私は音楽の方へ行こうかな、と。これもほんとに偶然といえば偶然なんですけど、小学校の時からずーっと一緒だった友達がやっぱり同じクラスでチェロをやっていて、その彼女がN音大の先生にずっとついていたんですよ。で、「N音大受けるから行きたかったら一緒にどう？」みたいな感じで。私は何も他の学校のこと知らなかったから彼女の話を聞いて、「あ、じゃあ受けてみようかな」っていう感じで。だからすごく甘い考えでね。

その彼女とは今もずーっと親友なんですけど、彼女の影響っていうのは大きかったですね。

両親は何でも好きなことやれっていう方針だったから。私学の音楽なんてすごくお金がかかるってこと自分はわかってなくてね。

それと、「もうこれ以上いいかな」って。例えばこの年の頃って17, 8歳になってますよね。それぐらいの年になると「もうこのお友達たちともずっといるのなあ…」って確か思っていました。

〈分析〉GさんはS大学へは進まずN音楽大学を受験して合格しそこに入った。高校生活の3年間で自分の得意な分野が音楽と英語であると分かったGさんは大学はそのどちらかを専攻しようと考えた。はっきりと語られてはいないがGさんにとって大学の進学以外の選択はほとんど考慮に入れられなかったようである。大学進学を前提としたうえでどの方面へ進むかと考えたときに、自分の得意な分野の方へ進むことをGさんは選択した。この〈得意な分野へ進みたい〉というGさん自身の意向が彼女のN音楽大学進学の大きな要因である。ただGさんの場合音楽と英語のどちらを選択するかという場面では、より得意な方を選ぶということにはならなかった。ここでは高校の教師が「音楽ってすごく大変だから英語のほうへ行った方がいいわよ」と忠告したことが逆に作用してGさんは音楽の道を志すことになるのだ。忠告した教師にしてみれば不本意だろうが、客観的にみればここでは教師の言葉は明かにGさんの選択に対して一つの重要な要因として働いている。音楽を専攻したいというGさんの意向がさらに具体的にN音楽大学の受験という形をとるにあたっては小学校以来の友達が誘ってくれたというGさんにとっては偶然的な要因が作用してる。そして最後に両親の「何でも好きなことをやれ」という方針がGさんの選択を実現可能なものとする補助的な要因となった。

〈まとめ〉

A 本人の要因：〈主観的要因〉大学進学 of 当然視、専攻に対する関心、〈客観的要因〉受験に合格する学力

B 本人外の要因：〈主観的要因〉親の教育方針「何でも好きなことをやれ」、友達の誘い、

教師の忠告

C 主要な要因：本人の専攻に対する関心

事例 H

〈S 大学家政学部進学〉中学・高校と行けたら、大学へ行くんだろうと母は思っていました。私自身は大学入る段階で、行きたいのかどうしようかっていった時に、ああ調理師の方をやりたいなと思って。で、ちょうどそれがあったからっていうことで。もしそれがなかったら、私本当に専修学校かどこか行こうかなっていうのがありましたね。大学に入りたいってあんまり思っていなかったのね。

母が商売だもんですから、やっぱり食事の世話なんかしますね。住み込みの子も居ましたし。帰りが遅くなるとご飯みんなに食べさせてっていう商売屋ですので、だから、調理師とか行こうかなってすごく迷ったんですよ。そうしたら学校の先生が、調理師より栄養士の方が段階的には一つ上だよ、やるんだったら専門的にやった方がいいんじゃないかって言われて。担任の先生にもそう言われて。じゃあということで。成績も食物科へいける範囲に入っていましたので。あと、食物のなかでも栄養士と管理栄養士があって、管理栄養士の方がまた一つ上だということなのでせっかくだからどうせやるんだったらこちらのほうが良いと思って。

〈分析〉高校までは進学が当然、しかも S 高校への進学が当然と考えていた H さんであったが、大学の進学は当然ではなかった。むしろ H さんは大学へ行こうという積極的な気持ちはなかった。「大学へ入りたいってあんまり思っていなかった」のである。H さんの周囲の状況を見てみると、母親は「中学・高校と行けたら、大学へ行くんだろう」と思っていた。また高校の友達も半数以上は大学へ進学していた。そういう状況を考慮すると、それまでの H さんの行動様式からすると大学進学もどちらかと言えば当然視されてもよかったと思われるが、実際にはそうではなかった。高校 3 年間の間に H さんの中に自分なりの教育観・人生観・世界観が育っていたということだ。高校を卒業する時の H さんは母親の意向や友達の動向よりも自分自身の価値判断で行動を選択するような女性に成長してしまっている。

H さんは調理師の勉強をしたかった。商売をしている母親の手助けをしたいと彼女は考えたのである。H さんの S 大学家政学部進学に関してはこの調理師への志望という彼女の主観的な要因がこの事態の主要な要因である。H さんがそのような志望を持っていたところに、S 大学に家政学部食物学科が設置されているという客観的な要因が加わることによって、進学という事態が実現したわけである。

さらに、高校の教師の「調理師より栄養士のほうが段階的に一つうえだよ、やるんだったら専門的になったほうが良いんじゃない」というアドバイスによって栄養士を志し、また栄養士より管理栄養士のほうが上の資格であることを知って、最終的には管理栄養士を志すことになる。

この段階では高校の教師の指示は H さんの進路選択にとって重要な要因として働いた。
〈まとめ〉

A 本人の要因：〈主観的要因〉専攻に対する関心；〈客観的要因〉推薦合格圏内の成績

B 本人外の要因：〈主観的要因〉高校の教師の忠告；〈客観的要因〉S 大学に希望の専攻

があったこと

C 主要な要因：専攻に対する関心

〈18事例のまとめ〉18事例について高校卒業後の進路選択の要因をまとめると次のようになる。

表4 高校卒業後の進路選択の主要な要因

	本人の要因	本人外の要因
主観的要素	大学進学意欲なく家事手伝い 短大の家政科が希望で他の短大へ 家政に関心があったのでS大へ 資格が欲しかったのでS大へ 音楽に関心があったので他の私大 英文科に関心があったのでS大 (公) 演劇に関心があったので他の私大 外へでる気がなくてS大 (私) なんとなく上(他私大)へ (私) 教師になりたいくて他の私大 美術に関心があった	祖母の勧めでS大へ 親の希望でS大へ 3
客観的要素	S内部推薦からまれて他の短大 他大学受験不合格でS短大へ (私) 受験不合格で他私大へ 2	S短大に家政科なく他の短大

①大学進学の時点になるとS学園の生徒は一気に自らの人生に対して主体的に関わるようになる。すなわち、S大・短大への進学は他の大学への進学との比較のなかで選択されたりされなかったりするようになる。自分の興味関心に合う学部学科がS大にあれば進学を希望するが、なければ他の大学・短大へ出て行こうとする。

②それに伴って当然「学力」などの客観的な要因が進路選択の過程で大きな意味をもって来る。そして、受験の成功による喜びや逆に失敗による辛さを味わう者も出てくる。

③しかし他方で、親などの意向に合わせた進路選択も依然としてあることが推測される。

④聞き取りの対象者のなかには内部推薦からはずれた者が一人しかいない。しかし、先に見たようにS高校からS大・短大へ進学するものは43.9%である。残りの56.1%は他の大学・短大へ進学したかあるいは進学しなかった。彼女らのうちのほとんどは内部進学を希望しながら不本意にS学園から押し出されてしまったのだと推測される。

おわりに

統計的に表れた進路選択の結果は一つの客観的な事実であり、その事実をさらに客観的な指標によってある程度説明することも可能である。しかし、それだけではその事実を生みだしている一人一人の選択行為とその行為に込められた意味は分からない。ここでは一人一人の行為者の内面に即して進路選択という行為がどのようにして生み出されていくのかをあきらかにしようとした。「一貫性教育」という特殊な教育をうけている子供たちに関

私立小学校卒業生の進路選択

してのみではあるが、ある程度は目的が達せられたのではないかと思う。

次の課題は、一般の公立小学校の在籍者に対して同様の調査をおこない分析を施すことである。

注

- 1) 「S小学校卒業者の生活意識調査」1954年から1982年までの卒業生全員（755名）を対象に行ったアンケート調査。調査時期：1989年11月。調査結果の分析は報告書『私立卒業生の経歴』としてまとめている。
- 2) S小学校の年次別卒業生数は次の通りである。

表5 年次別S小学校卒業生数（人）

卒業年次	(昭和) 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 (3) (4) (8) (14) (10) (6) (5) (6)																			
卒業生数	2 7 3 14 35 52 47 54 48 39 32 35 20 35 27 21 24 22 32 29 21 35																			
卒業年次	51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 1 (平成)																			総計
卒業生数	34 28 27 25 31 28 24 21 24 26 22 23 24 19																			970

() 内は男子

- 3) S小学校卒業生の進路の概略は以下のようになっている。
S小学校卒業生（165）のうち77.0%（127）がS中学へ進学。15.8%（26）が国公立中学へ進学。S中学卒業生（127）のうち96.9%（123）がS高校へ進学。S高校卒業生のうち30.1%（37）がS大学へ進学。13.8%（17）がS短大へ進学。23.6%が他の短大へ進学。13.0%が他の大学へ進学。19.5%（24）が非進学となっている。
- 4) 本論文の元になっている調査とは別に、筆者はS小学校在籍者の親を対象とした調査をおこなっているが、その中で子どもをS小学校へ入学させた理由を尋ねたところ「近所にあったから」と答えた親はわずかに4.6%であった。